



雨

道具とものづくりから
暮らしを考える

特集

傘

雨をたのしむ

15 號

QUALITY MAGAZINE FUDEBAKO

SUMMER 2008

デザイナーは
そう呼びかけた。



オフィスでの島村さん。手前はモナッカのバッグ。モナッカの材料はすべて、高知県馬路村のヤナセ杉の間伐材。高知県は島村さんの故郷だ。元は自動車メーカーのデザイナーで、独立後はプリンターから家具、小住宅のデザインやプロデュース等、幅広く活動している。主な仕事に「はとバスの新型観光バス hatomaru/NTTドコモ Pocket board/ニッカウスキーの再生樽デザインプロジェクト CASKOAK/ローバーミニ特別仕様車 LAPITA MINIほか。シチズン、オムロンなど電子機器メーカーのクライアントも多い
有限会社クルツ <http://www.t-shima.com/>

竹のシナリを生かした モノづくりをしよう



SINARU

傘の美しさは竹にあり

SINARUは「竹を現代の暮らしに生かそう」というプロジェクトである。発起したのはプロダクト・デザイナーの島村卓実。自然の素材、その力を生かしたものづくりを目指していて、杉の間伐材を使ったインテリア雑貨ブランド「モナッカ monacca」が、国内外で高く評価された実績がある。

そのモナッカのバッグに「今度は漆を塗ってはどうか」と考えた島村は、漆を精製・販売する佐藤喜代松商店に行き当たり、その若主人、佐藤貴彦と意気投合する。佐藤の会社は、本漆を独自の方法で細かく均一に精製したMR漆の開発に成功し、その優れた耐候性や塗膜の丈夫さ等を発揮できる、あらたな分野を探していたのだった。

その出会いから1年ほどして、島村は佐藤に次なる相談をした。

「竹のしなりを生かした何かをつくりたい」。

応じたのは 京都の若いふたり。



漆屋、



佐藤喜代松商店は漆の精製業者として大正10(1921)年に創業。全国の仏壇・仏具、和家具の工房に漆を販売するのをはじめ、京友禅などの染色型紙や製版資材を扱う。近年力を入れているMR漆は、良質でしかも扱いやすい自然塗料として注目を集め、これを使った食器洗浄機対応の漆器が開発されたほか、蒔絵を施した靴、漆プリントのアパレルや皮革小物、漆塗りのネイルチップや万年筆などが製品化。自動車への塗装も実用目前まで研究が進んでいる。また乾燥・硬化が進むことから建築への利用も増加。今回の本命では、MR漆の高い耐候性と色の変わりにくいことが生かされている。「漆の可能性を広げる新しい用途へのオファーには、すべて積極的に取り組んでいます」

佐藤喜代松商店 <http://www.urusi.co.jp>

竹のしなりは衝撃を吸収する一方で、ほどよい反発力も生む。そして、その形はとても美しい。日本人はそうした竹を存分に使いこなしてきた民族だった。が、今は日常から竹製品が消え行く一方である。それがとても残念だったのだ。

ほどなく佐藤は、自分と同じ京都出身の三木崇司と知り合う。茶道具や建築、垣根では最高級の竹材とされる京銘竹づくりで、右に出るものはない三木竹材店の若親方である。三木も、銘竹をよりよく知ってもらうべく、さまざまに試みていたのだ。

佐藤はさっそく島村に紹介、ここにSINARUが誕生した。三者の想いと材料が、ひとまず揃ったのである。

では、何をつくるか。さまざまに交わされた案は、やがて和傘に集約された。手近な道具のなかで、和傘は、もっともよく竹の特性を利用して見ると見たのだ。まず、軽い。傘骨はしなるから、あれだけ細くても折れることなく風に耐える。紙を破らさずしつかり張るのも骨がしなるからだ。結果、その骨組みには、すばらしい構造美がある。

ならば和傘の現状はどうか。言うまでもなく日常ではほぼ使われてい

そして竹材屋。



三木竹材店は竹材卸問屋として明治に創業。SINARUメンバーの崇司さんは、その若親方で五代目にあたる。手入れの行き届いた竹林から時機を得て伐り出し、加工する竹材の、パリエーションと質の高さに定評がある。火で培り油を抜いてつくる白竹づくりでは、林野庁長官賞や京都府知事賞など多数受賞。造園材料や各種竹製品への原料供給をはじめ、竹垣施工や内装装飾も得意とし、原竹

伐採から加工・最終施工まで一貫して行える数少ない専門店として、京銘竹の業界を牽引する。クライアントには名だたる老舗旅館や外資系高級ホテル、名園・名刹が名を連ねるが、忙しい現場の合い間を縫っては、子どもや市民を対象にした竹細工教室を開くなど、広範に竹文化の普及・紹介に奔走する

三木竹材店 <http://www.kyoto-niki.com/>

ない。島村の記憶の中の和傘には、油の香りと雨音、ほの暗さといった独特の好ましさがあったが、それが反面、現代では疎まれると理解した。傘立てには入れられないし、干す手間もかかる。せつかくのきれいな骨組みも隠れて見えにくい。

SINARUの目指す傘は、シンプルで軽やかであること。そして、竹のしなりの美しさも骨が見えること。傘紙が内側に畳み込まれる仕組みをきれいに残しつつ、和傘の不便さを解消すること。

2007年春、その具体化が始まり、実製作者として京和傘の老舗・日吉屋の五代目、西堀耕太郎の協力を得ることになった。

既存のモノを再構築する作業は、ゼロからの出発と比べてラクとは限らない。4人もたちまち、壁にぶつかった。なんだかんだと言えども、和傘はじつに完成度の高い道具である。その外観と機構は密接に結びついていて、生半可にいじくれるものではないのだ。立ち上げて3、4ヶ月は足踏みが続いた。

転機は夏も終る頃、閉じた形を紡錘形にするアイデアから訪れた。その突破口から噴出するように、手元にはロック機構をつけることや柄



宝鏡寺のご厚意で、天日干しには境内を借りる。一帯の風物詩ともなっており、カメラを向ける観光客も多い。蛇の目傘は25200円〜、番傘は18900円〜。精太郎さんが持つ大きな傘は、5尺の本式野点傘で、価格は378000円(いずれも税込)



KOTORI (価格はいずれも税込)
ペンダント型 60900円
フロアスタンド型 93450円
自立スタンド型 39900円

江戸時代後期の安政年間に初代西堀助蔵によって創業。二代目與三郎が宝鏡寺門前に店を開き、現在に至る。京和傘の正統を継ぐ店として、蛇の目や羽二重傘、番傘、日傘、舞傘などを揃える。当地は茶道家元 表千家と裏千家のお膝元にあたるため、本式野点傘をはじめとする御用もあずかるほか、神社仏閣へ差し掛け傘を納めているのも京都らしい。五代目の精太郎さんは和歌山生まれで、日吉屋へは入り婿として入った。カナダ留学の経験から、かねて抱いていた日本文化を支える仕事への夢を、和傘屋を継ぐことで実現。昔ながらの傘づくりを守りつつ、持ち前の革新性を発揮。今ではまずカジュアルしか使われない「濡かけ」に本漆を用いた伝統回廊の商品や、強化撥水・UV加工の導入、和風照明の開発にも取り組む。左写真は、デザイナーの長根寛氏、ブランドプロデューサーの島田昭彦氏とコラボレーションした古部里KOTORI (07年グッドデザイン賞中小企業庁長官特別賞受賞ほか受賞多数)。傘の部品と構造を使いながら、モダンなインテリアにも合う洗練されたライトに。このときの経験が、今回のWAGASAづくりにも生きていくという

日吉屋 <http://www.wagasa.com/>

「竹のしなりを生かす」SINARU、次の目標は何か。ランプ、ペン etc. 何をつくるにしても、七転八倒の展開は必至である。島村は言う。「ものづくりは人脈だ」。

世界中の人に、雨を待ち遠しくし、

長く愛着をもてる傘として届けるまで、彼らに立ち止まる時間はないだろう。見ていて、その気概に心底感動するのである。

「ああいいう時代に、こんなにすごいモノをつくったんだから」。

これからの展開として、透明フィルムを竹布に替えたもの、漆でフル塗装したもの、柄に銘竹をせいたくに使ったもの、子ども用、完全オーダー品……課題はたくさんある。海外からの引き合いも多い。

生んだ昔の人に感謝したそうだ。「ああいいう時代に、こんなにすごいモノをつくったんだから」。

それが文化の継承と考えるのだ。WAGASAの過程でも、和傘を

生んだ昔の人に感謝したそうだ。「ああいいう時代に、こんなにすごいモノをつくったんだから」。

古くからあって使われてきた材料と技術には、それだけの理由がある。デザインするとき島村は、構造や色・形は変えても、そこから受けるオーラは変わらないよう努めると言う。

「日本の心」でつくられている。その意識と、修理できる点をとくに評価されたという。

古くからあって使われてきた材料と技術には、それだけの理由がある。デザインするとき島村は、構造や色・形は変えても、そこから受けるオーラは変わらないよう努めると言う。

それが文化の継承と考えるのだ。WAGASAの過程でも、和傘を

生んだ昔の人に感謝したそうだ。「ああいいう時代に、こんなにすごいモノをつくったんだから」。

「ああいいう時代に、こんなにすごいモノをつくったんだから」。

古くからあって使われてきた材料と技術には、それだけの理由がある。デザインするとき島村は、構造や色・形は変えても、そこから受けるオーラは変わらないよう努めると言う。

それが文化の継承と考えるのだ。WAGASAの過程でも、和傘を

生んだ昔の人に感謝したそうだ。「ああいいう時代に、こんなにすごいモノをつくったんだから」。

「ああいいう時代に、こんなにすごいモノをつくったんだから」。

古くからあって使われてきた材料と技術には、それだけの理由がある。デザインするとき島村は、構造や色・形は変えても、そこから受けるオーラは変わらないよう努めると言う。

それが文化の継承と考えるのだ。WAGASAの過程でも、和傘を

生んだ昔の人に感謝したそうだ。「ああいいう時代に、こんなにすごいモノをつくったんだから」。

「ああいいう時代に、こんなにすごいモノをつくったんだから」。

古くからあって使われてきた材料と技術には、それだけの理由がある。デザインするとき島村は、構造や色・形は変えても、そこから受けるオーラは変わらないよう努めると言う。

それが文化の継承と考えるのだ。WAGASAの過程でも、和傘を

生んだ昔の人に感謝したそうだ。「ああいいう時代に、こんなにすごいモノをつくったんだから」。

「ああいいう時代に、こんなにすごいモノをつくったんだから」。

そこへ傘屋が参画、WAGASAが立ち現れた。



4月初旬の打ち合わせ。5月から販売するモデルの仕様に入念なチェックが行われた。また、どんどん膨らむWAGASA試作・開発費用をどう工面するか、展示スペースのディスプレイのこと、海外見本市からの出張要請へどう対応するかなど、がっぶり四つ、隙間のない熱いディスカッションが繰り返された



上の2枚 樹脂でつくられたWAGASAのロクロ。切り込んだ溝からワイヤーを水平に通し、骨をつなげている。天ロクロの上には、和傘のから巻き(35頁参照)に相当する可動部品があって、開閉にかかる力を吸収する。下右は試作で使った半透明のタイプと、採用されたEVA+PPの三層構造特殊フィルム。(右側の透明なもの)。この特殊フィルムは環境負荷が軽く、折グセがきれいに付く

SINARU
WAGASA

価格 30450円(税込)
サイズ 760mm(長さ) × 50mm(一番太い所)
販売についての問合せ先
佐藤喜代松商店 <http://www.sinaru.jp> TEL 075-461-9120
*太さは竹によって若干変わります
*写真は試作段階のもので、販売される商品とは若干異なります



の長さ、カッパ(13頁参照)がなくとも防水できる天井部分の仕様が一気に決まっていた。

流用できる既存の部品は骨のみだ。西堀は、ロクロをはじめとするパーツの試作を延々と繰り返した。

「骨が見える傘紙」には、透明フィルムを採用した。ビニ傘への懸念はもちろんなあったが、骨を見せるため、現状では唯一の選択肢だとする。センサーションを巻き起こすための必然でもあった。数種の中から、紫外線に強く伸びがよく、リサイクルも可能、かつ折りグセがつくのできれいに畳めるEVA樹脂とPPの複合フィルムを採用。傘骨は黒、赤、緑のMR漆を塗ったものと、無塗装で竹そのものの色を見せた4色展開に決めた。

2007年10月。ギリギリいっばいの雪崩れ込むようなスケジュールで東京でのデザイン展「100% Design」に持ち込まれたこの傘は「3000年ぶりのモデルチェンジ」を経たWAGASAとして発表されたのである。

WAGASAは08年5月28日、新宿店を皮切りに高島屋各店舗にて発売を開始した。洋傘ではないが、和傘でもないWAGASAは、しかし

の長さ、カッパ(13頁参照)がなくとも防水できる天井部分の仕様が一気に決まっていた。

流用できる既存の部品は骨のみだ。西堀は、ロクロをはじめとするパーツの試作を延々と繰り返した。

「骨が見える傘紙」には、透明フィルムを採用した。ビニ傘への懸念はもちろんなあったが、骨を見せるため、現状では唯一の選択肢だとする。センサーションを巻き起こすための必然でもあった。数種の中から、紫外線に強く伸びがよく、リサイクルも可能、かつ折りグセがつくのできれいに畳めるEVA樹脂とPPの複合フィルムを採用。傘骨は黒、赤、緑のMR漆を塗ったものと、無塗装で竹そのものの色を見せた4色展開に決めた。

2007年10月。ギリギリいっばいの雪崩れ込むようなスケジュールで東京でのデザイン展「100% Design」に持ち込まれたこの傘は「3000年ぶりのモデルチェンジ」を経たWAGASAとして発表されたのである。

WAGASAは08年5月28日、新宿店を皮切りに高島屋各店舗にて発売を開始した。洋傘ではないが、和傘でもないWAGASAは、しかし

の長さ、カッパ(13頁参照)がなくとも防水できる天井部分の仕様が一気に決まっていた。

流用できる既存の部品は骨のみだ。西堀は、ロクロをはじめとするパーツの試作を延々と繰り返した。

「骨が見える傘紙」には、透明フィルムを採用した。ビニ傘への懸念はもちろんなあったが、骨を見せるため、現状では唯一の選択肢だとする。センサーションを巻き起こすための必然でもあった。数種の中から、紫外線に強く伸びがよく、リサイクルも可能、かつ折りグセがつくのできれいに畳めるEVA樹脂とPPの複合フィルムを採用。傘骨は黒、赤、緑のMR漆を塗ったものと、無塗装で竹そのものの色を見せた4色展開に決めた。

2007年10月。ギリギリいっばいの雪崩れ込むようなスケジュールで東京でのデザイン展「100% Design」に持ち込まれたこの傘は「3000年ぶりのモデルチェンジ」を経たWAGASAとして発表されたのである。